

研究助成実施報告書

助成実施年度	2017年度（平成29年度）
研究課題（タイトル）	近代日本の公会堂建築の再評価に関する研究－「四大公会堂」と地方都市の公会堂の比較を中心に－
研究者名※	西澤 泰彦
所属組織※	名古屋大学大学院 環境学研究科 教授
研究種別	研究助成
研究分野	都市計画、都市景観
助成金額	99万円
概要	本研究は、明治時代から昭和戦前において日本各地に建てられた公会堂建築について、網羅的な情報収集を基に、日本における公会堂建築の発展・変容過程を明らかにし、さらに、現存する公会堂建築の再評価をおこなったものである。その結果、日本の公会堂は、①行動の大規模化・多目的ホール化、②公会堂機能の多様化、③建物の不燃化・耐震化、という3点が同時進行しながら発展し、最終的に「公会堂建築の大規模化」という現象にたどり着いた。その出発点に位置するのは、奈良県公会堂（1904年）と函館公会堂（1909年）であり、到達点に位置したのは台北市公会堂（1936年）と京城府民館（1936年）の2件であった。後者の2件は、いずれも日本の植民地建築であった。
発表論文等	

※研究者名、所属組織は申請当時の名称となります。

() は、報告書提出時所属先。

1. 研究の目的

(注) 必要なページ数をご使用ください。

本研究は、明治時代から昭和戦前において各地に建てられた公会堂建築について、網羅的な情報収集を基に、日本における公会堂建築の発展・変容過程を明らかにし、さらに、現存する公会堂建築の再評価をおこなうものである。日本国内では、大阪市公会堂、名古屋市公会堂、日比谷公会堂を「三大公会堂」と呼んでいた。これに対し、日本支配下の台湾では、台北公会堂を含めて「四大公会堂」と呼んでいた。同時期、別府、豊橋、浜松、静岡といった地方都市にも公会堂が新築されていった。このような状況において、従来の建築史分野の研究では、日比谷公会堂のような著名な公会堂についての個別研究はあるものの、20世紀前半の日本において、各地に建てられた公会堂を総体的に扱う研究はなかった。これを踏まえ、本研究は次の4点に研究の特徴がある。

1点目は、本研究が、「四大公会堂」と称される規模の大きな公会堂と地方都市に建てられた公会堂の比較を通して、日本の公会堂建築の全体像を明らかに、それを基に現存する公会堂建築の再評価をおこなうことである。

2点目は、このような公会堂建築について、すでに滅失した物件も含め日本に建てられたていった公会堂建築について、網羅的に情報を収集し、建築構造、建築計画、建築様式・意匠の点のみならず、社会的評価という複眼的視点によって研究を進めることである。

3点目は、「四大公会堂」と地方の公会堂を比較しながら、複数の公会堂の関係を紐解き、個々の公会堂を建築史上に位置付けることである。「四大公会堂」の基になった概念は、日比谷、名古屋、大阪中央の各公会堂が、規模や設備の面で地方都市の公会堂とは大きく異なっていたことに対し、台北市公会堂がそれら「三大公会堂」に匹敵する公会堂として建てられたことに起因している。

4点目は、公会堂という公共施設が全国に普及していく過程を明らかにすることである。公会堂は公共施設であるが、学校の校舎とは違い、政府が基準を設けて建設を誘導したわけでもなく、また、病院のように建てることに高い必然性があるとも思えない。そのような状況のもとで、本研究は、公会堂建築が普及した過程と背景を解明するものである。

2. 研究の経過

(注) 必要なページ数をご使用ください。

本研究は、明治時代から昭和戦前において各地に建てられた公会堂建築について、網羅的な情報収集を基に、日本における公会堂建築の発展・変容過程を明らかにし、さらに、現存する公会堂建築の再評価をおこなったものである。研究は、次に示す段階を経て研究を進めた。

i) 文献調査による公会堂建築の情報収集と復元

全国各地に建てられた公会堂の情報を収集し、「日本の公会堂建築一覧」(添付資料I、以下「公会堂一覧」と略す)を作成した。その過程で2点が問題だったが、これは、研究成果に連動するので、詳しくは「3. 研究の成果」の項目にて記す。そして、「公会堂一覧」では、検討の結果、「公会堂」を「不特定多数の人々に対してさまざまな内容の講演、演説をおこなうことを主目的とした施設」と定義し、それに見合う建物を収録した。

以上の方針に基づき、「公会堂一覧」作成は、2018年5月から9月にかけておこなった。なお、作成にあたり、研究代表者の下で修士論文作成に当たっていた大学院生の協力を得た。

ii) 現存公会堂建築の現地調査

「公会堂一覧」に収録された公会堂建築のうち、現存する7件公会堂建築（小樽市公会堂、岩手県公会堂、郡山市公会堂、大日本報徳社大講堂、大阪市中央公会堂、御影公会堂、別府市公会堂）について、現地調査をおこなった。なお、函館区公会堂と名古屋市公会堂については耐震化工事中であり、また、額田郡公会堂は閉館中、さらに調査日程が合わなかった日比谷公会堂と豊橋市公会堂については、本研究開始前に得ていた情報を利用することとした。現地調査は、2018年10月から始め、一部は調査日程の都合から2019年3月までかかった。これらの調査では、次の2点を中心におこなった。

①公会堂建築の立地条件と敷地に関する情報：文献調査では得られ難い立地条件や敷地に関する情報を収集し、それぞれの公会堂建築の設計時における工夫などを把握する。②竣工後の使われ方に関する情報：文献調査では得難い竣工以降の情報を把握する。特に用途の変更や増改築に関する情報を収集する。

この間、iii) iv) の作業を平行しておこなった。また、調査開始直後、公会堂の定義についての議論の過程で、公会堂という名称はないものの、旧京城府民館も調査対象に加えるべきという結論に達し、研究代表者と分担者がともに2019年5月にソウルを訪れる機会を使って、建物の外観と位置の確認をおこなった。また、旧植民地に建てられた公会堂の扱いについて、研究代表者と分担者で議論の結果、「四大公会堂」という言葉には、台湾総督府が建設した台北市公会堂が含まれていることから、加えることとし、研究代表者が既に得ていた情報を利用した。

iii) 公会堂建築相互の関係

上記i) ii)の結果を基に、「四大公会堂」と地方都市の公会堂との関係、さらに、当時注目を集めた公会堂と他の公会堂との関係を把握し、「日本の公会堂建築相関図」を作成した。この作業は、2018年10月から11月にかけて進めた。

iv) 公会堂建築の体系化

上記i) ii) iii)の結果を基に、近代日本の公会堂建築を体系化し、「日本の公会堂建築相関図」を基に「日本の公会堂建築の変遷」（添付資料2）を作成した。これらは2018年12月から2019年1月にかけておこなった。

v) 公会堂建築の評価

上記i) ii) iii) iv)の結果を基に、現存公会堂の再評価を試みた。特に、研究題目の付した「四大公会堂」と地方の公会堂の関係を中心に、単に建築に関する項目である建築構造、建築計画、建築様式・意匠の点からの評価のみならず、公会堂建築に関する社会的評価も試みた。これは、2019年2月から3月におこなった。

3. 研究の成果

(注) 必要なページ数をご使用ください。

研究の経過に記した作業内容に合わせて研究の成果を記す。

i) 公会堂建築の定義

「公会堂一覧」を作成する過程にて、次の2点が問題として浮かび上がった。

1点目は、公会堂の定義である。「公会堂一覧」では、建物名称に「公会堂」という単語が付された物件を収録することを原則とした。しかし、「公会堂一覧」作成中に研究代表者と分担者の間で生じた議論は、「公会堂」という単語が付されていない建物であっても、公会堂と同

じような機能を持った建物が存在しているので、それを「公会堂一覧」に加えるべきであるという問題である。具体的には、大日本報徳社大講堂のように地元自治体が公共施設を整備するまで実質的に公会堂の役割を果たしていた建物、小樽市役所庁舎に設けられた市議会議場のように公会堂と併用していた建物、1950年代に各地に修験した「市民会館」と称される建物、また、日本の植民地支配下にあった京城（ソウル）において1936年に竣工した京城府民館、という具合に、これらは、「公会堂」とは称していないものの、実際には同じ時期に建てられた公会堂と同様の機能を有していた。

2点目は、1点目に関連して、公会堂の定義が困難な理由は、公会堂が出現した明治時代から現在に至るまで、公会堂を規定する法律や制度が存在しないことであった。そこで、「公会堂一覧」を作成するにあたり、既述の通り、建物名称に「公会堂」という単語が付された建物を収録することを基本とし、さらに、「2. 研究の経過」で記した通り、「公会堂」を「不特定多数の人々に対してさまざまな内容の講演、演説をおこなうことを主目的とした施設」と再定義した。仏教建築における本堂やキリスト教の聖堂も不特定多数の人々を相手に説法、法話、講話をおこなっているが、これらはあくまでも布教のためであり、特定の宗教に関する講話をしており、「さまざまな内容の講演」とは異質であるため、宗教施設は「公会堂一覧」に含めないこととした。

以上の検討と「公会堂一覧」から判明したことは、次の2点である。

1点目は、公会堂を規定する法律や制度がないことに起因して、機能と規模の差異が大きいことである。公会堂を「不特定多数の人々に対してさまざまな内容の講演、演説をおこなうことを主目的とした施設」と再定義したので、演壇と客席が一体となった所謂ホール（大講堂）を有している点は共通するが、他の機能についてはさまざまな類型がある。そして、ホールの規模はもちろんのこと、建物全体の規模も多様である。

これを前提に全国各地に公会堂建築が新築されていく1910年代から1930年代、そして、1950年代の公会堂建築を比較すると、①大阪市中央公会堂に代表される大都市に建てられた規模の大きな公会堂で特に複数の機能を1棟の建物に収めた公会堂、②額田郡公会堂に代表される地方の小さな公会堂で複数の機能を別棟に分散していた公会堂に大別される。

2点目は、1点目で指摘したことを時間軸で整理すると、規模と機能の違いを一つの変化として、次のように説明できる。それは、まず、講演・演説をおこなう講堂に着目すると、100人から200人規模の講堂→1,000人規模の講堂→演劇・音楽会対応の講堂の出現≡講堂の多目的ホール化、という変化である。それと同時に、講堂以外の機能の付加について、講堂と講師控室など附属する小規模な部屋のみ→大食堂などの宴会施設やバーなどの娯楽施設の付加→複数の会議室の付加、という変化をたどっている。

ii) 公会堂建築相互の関係

これまでに収集した情報によって個別の公会堂建築について、その相互関係が確実に確認できた事例が2事例あった。

ひとつは、1928年竣工の別府市公会堂と1931年竣工の豊橋市公会堂である。もう一つは、1930年竣工の名古屋市公会堂と1936年竣工の台北市公会堂である。

前者について、伊藤晴康氏（豊橋創造大学学長）から提供された情報である。別府市公会堂が竣工した直後、豊橋市では昭和天皇御大典記念事業と市政施行25周年記念事業を合わせたか

たちで、公会堂建設を決め、そして、その参考のため、市議会議員から調査委員会が別府市を視察したというものである。その後、豊橋市公会堂の実施設計は、建築家中村與資平が主宰する中村工務所に依頼された。その内容を別府市公会堂と比べたとき、共通点として目を引くのは、大講堂（ホール）のホワイエを2階に設けていること、1階に大食堂を配したこと、そして、正面の構成である。特に2階にホワイエを設けたことで、建物正面に地上から2階正面玄関に至る幅の広い「大階段」を設けられたが、これは、全国各地の公会堂の中で特異な存在である。いずれの公会堂も1階の床高を地盤面より高くするのは当然のことなので、半階程度の階段が付くのは大阪市中央公会堂や名古屋市公会堂にもみられる通例の設計手法である。しかし、別府市公会堂と豊橋市公会堂に共通する「大階段」は、この2棟のみに見られるものであることを勘案すると、大階段を含む前記の3点は、別府市公会堂で用いられた設計内容が豊橋市公会堂に影響を与えたといえる。

後者について、台北市公会堂の設計を担当した井手薫が記した「台北市公会堂落成式における工事報告」（『台湾建築会誌』9巻3号、1937年5月）が、「此建物は其の大きさ並に内容に於ては、東京、大阪、名古屋の3公会堂の次に位するものでありまして即格式に於て我が国大都市公会堂の班に列し得るもの」「当初本公会堂建設に方りまして台北市より要求せられました建物内容に対する希望条項を見ますに殆んど名古屋のものと同程度であるに拘わらず用意してある予算は彼の半にも及ばぬものであった」と記していることから、井手が名古屋市公会堂の情報を持っており、かつ、日本国内の「三大公会堂」と呼ばれた日比谷公会堂、名古屋市公会堂、大阪市中央公会堂を意識して設計したといえる。台北市公会堂と名古屋市公会堂を比べると、大講堂（ホール）の形態、舞台の形式、大食堂の規模はよく似ている。しかし、公園内とはいえ敷地範囲が限定されていた名古屋市公会堂が大講堂の上に大食堂を積み上げたのに対して、台北市公会堂では、敷地に余裕があったため、大講堂の背面に大食堂を配置したことは大きく異なっていた。

以上のように、具体的な関係が確実に指摘できる2事例が確認できた。これに対して他の多数の公会堂については、具体的な関係を文献資料で確認することは難しいが、建築的特徴を基に、以下、公会堂建築の体系化を試みた。

iii) 公会堂建築の体系化

i) で示した通り、20世紀前半の日本の公会堂建築は、講堂中心の小規模なものから出発し、講堂の大規模化と多目的ホール化、公会堂機能の多様化、耐火・耐震性能の向上のためのRC造化、という3つの動き（方向性）が同時に進行した。これを図式化したものが、「日本の公会堂建築の変遷」（添付資料2）である。ここでは、単なる時間軸に依拠した変遷ではなく、前記の3つの方向性が同時進行したことが分かるように立体的な表現を試みた。この図に記された公開講堂の具体例は、それがそのまま、iv) で示すそれぞれの公会堂建築の評価・位置付けを示すものである。

iv) 公会堂建築の評価

iii) に示した「日本の公会堂建築の変遷」（添付資料2）に基づき、現存する公会堂建築の評価を試みた。まず、重要文化財指定されている函館区公会堂(1910)と額田郡公会堂(1913)の2件に加え、すでに取り壊された奈良県公会堂(1903、1986取り壊し)の3件が日本の公会堂建築の原点に位置する。木造であり、かつ、講堂機能の他に付加された機能が少なく、講堂が

単層であることを勘案して、原点に置いた。時間的祖語は生じるが、重要文化財指定されている大日本報徳社講堂(1904)は、木造であり、かつ講堂以外の機能がないが、講堂内部が2層化しているので、原点に置くことはできず、原点近くに置いた。

これに対して、講堂の大規模化と多目的ホール化としての変化の到達点に位置するのが日比谷公会堂(1929)である。原点にある4件の公会堂はいずれも100~200人程度を収容する規模の講堂しかなかったが、講堂の大規模化に伴い、客席数が増え、日比谷公会堂では2,700人収容の客席が2階から5階に設けられ、講堂は4層吹き抜けの巨大な空間になった。また、原点の4件では小規模な演壇しかなかったが、講堂の多目的ホール化に伴い、演壇が舞台としてつくられるようになり、加えて、十分に検討された音響設計がなされた。1950年代以降、さまざまな多目的ホールが全国各地に出現するが、客席から舞台への視線、ホール全体の音響を考慮すると、客席をこれ以上高層化することは難しく、日比谷公会堂における4層吹き抜けの講堂の形態は、ひとつの到達点である。その後、東京文化会館(1961)に竣工によって5層吹き抜けの講堂が出現するまで、日比谷公会堂を越える大規模な「公会堂」は出現しなかった。

他方、複数の機能に対応したさまざまな部屋を1棟に収める「機能の多様化」は、大阪市中央公会堂(1918)で始まり、別府市公会堂(1928)、名古屋市公会堂(1930)に引き継がれていく。大阪市中央公会堂では、大集会室(ホール)と同じ間口×奥行の大食堂が4階に設けられ、宴会場、結婚式場としての場を市民に提供した。この手法は名古屋市公会堂でも踏襲された。さらに、また、この動きは小規模な公会堂にも影響を与えている。また、大阪市中央公会堂には、このほかにも会食可能な中規模の会議室があり、地下に「酒場」と称されたバーが設けられていた。このような機能の多様化はその後の公会堂に影響を与えたと考えられる。名古屋市公会堂にも同様に中規模の会議室や小規模の会議室が設けられ、さらに、和室も設けられた。別府市公会堂や豊橋市公会堂では、講堂の下に大食堂が設けられ、宴会の場を市民に提供した。また、別府市公会堂ではそのほかに温泉を引き込んだ浴場とビリヤード台とバーを備えた遊戯室が設けられていた。小規模な公会堂の例として御影公会堂(1933)では、講堂の下に宴会場を設け、また、玄関上部に会議室、地下にレストラン、さらに、屋上に展望台を備えていた。このような多種多様な機能が公共施設である公会堂に設けられたことで、公会堂は社交の場としての役割を果たし、いわば、倶楽部機能を市民に提供した。そして、機能の多様化の究極は、1936年竣工の台北市公会堂と京城府民館である。これらには、大講堂、大食堂のみならず、多様な規模の会議室、和室、さらに、理容室が設けられていた。両者とも日本の植民地支配下に成立したという状況にあったことを差し引いても、両者は市民のさまざまな活動の拠点となり、公会堂機能の多様化の到達点にあるといえる。

しかし、この機能の多様化は、1950年代に入り、戦災復興が進み、1960年代には都市部で大規模なホテルが出現すると、宴会機能をホテルが担うことになり、この時期の「公会堂」(文化会館)からは、宴会の場を供する大食堂は消えていく。さらに、既存の公会堂の大食堂も単なる集会室に転用されていく。

もう一つの方向性である公会堂建築の不燃化・耐震化について、公会堂に多様な機能が盛り込まれ、講堂の多目的ホール化が進むと、それに合わせて、建物の躯体構造が木造から鉄筋コンクリート(RC)造に変化していった。その途中で、大阪市中央公会堂のように一部に煉瓦造を取り入れる公会堂が出現するが、1920年代以降の公会堂は概ねRC造の躯体で、大講堂の上に

鉄骨造の架構を架ける形式に収斂していく。そして、この構造形式は、結果的に、建物の不燃化・耐震化に効力を発揮していく。例えば、御影公会堂では、同規模の講堂を木造で建てることも可能であったと思荒れるが、実際にはRC造の躯体に鉄骨造の屋根を架けていた。兵庫県南部地震（1995）で周囲の建物に甚大な被害が出た中で、御影公会堂はほとんど被災せず、避難所となったのは、この建物がRC造であったためである。

以上を勘案すると、日本の公会堂建築の到達点に位置するのは、台北市公会堂と京城府民館であり、その手前の段階として名古屋市公会堂を位置づけることが出来る。

4. 今後の課題

(注) 必要なページ数をご使用ください。

今回の研究では、20世紀前半の日本における公会堂建築の評価を試みたが、その結果、次の点が課題として残った。

1点目は、公会堂建築に関する情報、資料収集の難しさと、現存する公会堂の見学の難しさである。竣工時の情報収集は困難を極めたが、特に、建築図面の収集については、建物が取り壊されていた場合、ほとんど不可能であり、また、建物が現存している場合でも、竣工時の状況を示す図面を確保することは難しい。さらに、現存する公会堂の多くが、昨今は、指定管理者による管理の結果、「貸館」として使われていることが多く、その場合、通常の建物見学は不可能なことが多い。

2点目は、公会堂建築の特異性である。公会堂は一般的に、Public hallと英訳されることが多い。しかし、これを実際に公会堂の英訳として使っても、欧米人には通じないことが多い。それは、公会堂に相当する公共施設が、欧米に存在しないためである。欧米では、市役所をCity hall、町役場をTown hallと呼ぶ。これは、市役所や町役場という行政機関の建物に必ずHallと呼ばれる講堂が付いているためである。このHallは、市町村議会の議場であるが、議会が開かれていない時期は、公共の場として一般市民に開放されている。市民の代表が集まる議場は、「市民の場」でもあるという草の根民主主義に裏打ちされた社会システムの反映であるといえる。したがって、公共施設として、単独でHallを建てる必要はないのである。一方、日本では、議場と公会堂を兼用していた事例として、小樽市役所庁舎（1934）の3階に設けられた議場が一時期、公会堂として利用されていたが、これは非常に稀有な例である。このような事実を勘案すると、日本で公会堂建築が成立し、発達した背景には、日本と欧米における社会システムの違いがあり、公会堂建築は、世界の建築の中で特異な存在であるといえる。今後は、その特異性を明らかにするため、世界の建築の中での日本の公会堂建築の特異性や優位性、さらに位置づけを示す必要があるといえる。

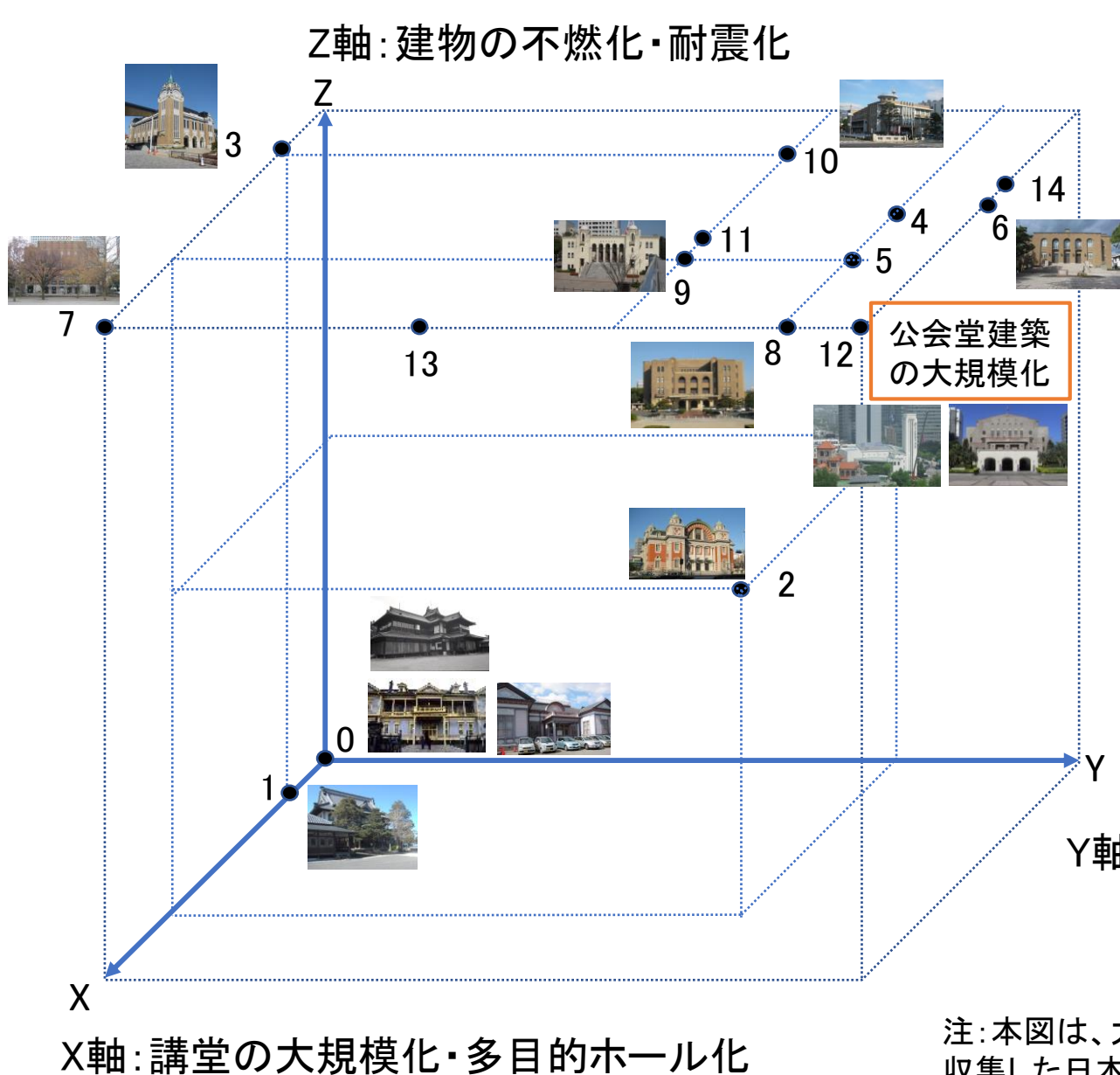
表1 日本の公会堂建築一覧										添付資料1
No.	名称	建築年	所在地	設計者	施工者	構造/階数	面積 (㎡)	ホール客席数 (固定席のみ)	建築経緯	備考
	竣工時名称→現名称	起工→竣工					敷地/建築/延床			
1	豊平館附属公会堂→札幌公民館→札幌市民会館	→1927.→1958撤去	札幌市						豊平館の附属施設として1927年竣工。1958年豊平館の移築保存に伴い解体。	
2	鳴尾学校→鳴尾公会堂	1882.6.25上棟→1882	名古屋市	青山角左衛門	青山角左衛門	W造/1				
3	遠江国報徳社公会堂→大日本報徳社大講堂	1901.7.→1902.4.5	掛川市			木造/2	/315.09/	(置81畳敷+板床2階席)	旧遠江国報徳社公会堂は、掛川市の北東に二宮尊徳の教えを体系化した報徳思想を普及・啓蒙する中心拠点として建設された。現在は1階畳敷のみ100人収容。	入母屋造、正面玄関及び背面便所附属正門の奥に東面して建ち、桁行20m、梁間15.8m伝統的な木造建築の形式・技法によりながら、1階が和風、2階が洋風の外観をもつ。内部は81畳敷で吹抜の大広間を中心に、正面には演壇、2階三方には吊り構造の棧敷を設けている。2009年重要文化財(建造物)。
4	奈良県公会堂	→1903	奈良市	橋本卯平		木造/1+塔屋3階			橋本は奈良県技師。1985年取り壊し。	
5	本荘町議事堂→本荘市公会堂	→1906	本荘市美倉町			W造/1				取り壊された。
6	浜寺公会堂	→1908	堺市							
7	長浜市公会堂	→1908								
8	旧箕面公会堂 (公会堂劇場)	→1910							箕面有馬電気軌道(現在の阪急電鉄)は動物園を併設したレジャー施設を宝塚駅周辺に作ることを計画し、大正19年(1924年)に宝塚ルナパーク(後の宝塚ファミリーランド)が開業、劇場だった箕面公会堂も開館した。大正8年(1919年)に宝塚に移築、歌劇場として活用された。	
9	福岡県公会堂	→1910	福岡市中央区西中洲	三條栄三郎		W造/2	/396.3/		那珂川と茶院新川が合流する三角州の先端、西中洲の一角に建てられた。建設目的は明治43年(1910年)に開催された第13回九州沖縄八県連合共進会の来賓接待所であり、竣工した明治43年4月には開院宮御夫妻宿泊所として利用されたほか、共進会開催中は来賓を接待して夜会が開催された。共進会終了後は県公会堂として一般市民に利用され、戦後は福岡高等裁判所、福岡県農林事務所などに転用、昭和31年11月以降は福岡県教育委員会庁舎として使われた。	外装は石造に擬したモルタル仕上げとし、内部の貴賓館などの諸室は藩風意匠が施されている。保存状態は良好で、数少ない明治時代の木造公共建築の遺構である。1984年5月21日国の重要文化財に登録。
10	函館区公会堂	→1910.6	函館市	小西 朝次郎	村木 基三郎	W造/2			明治40年(1907年)の大火により町会所が焼失し、新たな集会所建設計画が持ち上がった際、初代相馬哲平が50,000円の寄付を申し出て、明治43年(1910年)工費58,000円余りで完成した。	1910年9月20日開業式。1974年重要文化財、川崎竜司前掲書。
11	明石市立中崎公会堂	→1911	兵庫県明石市相生町			W造/1	/499/		もと海岸沿いに立地し、北面して建つ、4層に下屋を廻らし、正面に唐破風造の車寄を付した玄関を張出す。小屋をトラス組とし、寺院風の外観が特徴的な市内で現存最古の公共施設。	1983年改修2012年国の登録有形文化財になった。
12	旧帯広区(十勝)公会堂	→1911	帯広町			W造/1				
13	釧路公会堂	→1911	釧路市							
14	小樽区公会堂 →小樽市公会堂	→1911	小樽市花園5丁目2番1号	木子 幸三郎	加藤忠五郎(大虎組)	W造/1+W造/1			1911年8月皇太子(後の大正天皇)北海道行啓の宿泊所「御旅館」、行啓後に小樽市公会堂。1960年、市民会館建設に伴い、現在地に移築。同時に能楽堂が移築・増設、RC造地下増設。1985年小樽市指定歴史的建造物。	
15	中崎公会堂	→1911	明石市中崎町	加護谷 佑太郎		W造/1				1982年改装。
16	堺公会堂	→1912		辰野・片岡事務所		W造/2				パレディ風の大きな開口部が正面にデザインされた洋風建築。
17	八雲公会堂	→大正初	八雲町							
18	摂津市立第6集会所 (旧一律屋公会堂)	→1913	摂津市一律屋			W造/2	296.05/222.95/327.09			建物内部には楽屋として利用できる地下室や、機数席、黒御簾がある。屋根は日本葺き、外壁は杉模羽目板貼り、基礎はコンクリート、天井は格子天井、2010年摂津市有形文化財に指定。
19	額田郡公会堂→岡崎市郷土館	→1913	岡崎市	元愛知県営繕課技手 吉田栄蔵		W造/1				1999年(平成11年)12月1日 額田郡公会堂と額田郡遺産陳列所が、国の重要文化財に指定される。2004年4月補修工事完成。2010年4月老朽化していた重要文化財建造物の耐震補強工事と改修を行うため郷土館としては閉館、2014年4月完全閉館。
20	旧土別町公会堂	→1915	土別市		清水 勝太郎	W造/2				
21	横浜市開港記念会館 (現在中区の公会堂)	→1917	横浜市	山田七五郎、佐藤四郎(原案福田重義)		煉瓦(一部RC、SRC造)、地上2階+塔屋5階、地下1階	/1520/4426	500 (現在)	開港50年祭記念事業として、また1906年に類似した横浜会館の再建設として、市の有志から寄付金50万円を募った(中横浜商業会議所から4万円)。1909年に地鎮祭が行われ、1914年に着工、1917年6月30日竣工、7月1日開港記念横浜会館の名称で開館。	1923年関東大震災時に全焼したが、1927年(昭和2年)に初期の建築を復元した状態で再建された。昭和2年の再建時に省かれたドーム部が1989年(平成元年)に再建されると同時に、国の重要文化財に指定された。2007(平成19年)近代化産業遺産に認定される。現在も横浜市中区公会堂として利用されている。
22	旧鹿角郡公会堂 (花輪図書館民俗資料館)	→1917	鹿角市	笹原 緑哉	菅 滝蔵	W造/1	/542/	300 (収容可能)	大正5年(1916)9月に大正天皇御大札記念として新築された。	戦前は各種行事に利用され、戦後は地域文化、教育活動施設として利用された。昭和57年からは民俗資料1500点を展示する資料室として利用され、平成28年度より改修工事を行い、平成29年11月より市民歴史民俗資料館としてリニューアルオープンした。平成3年3月26日市指定有形文化財(建造物)。
23	福島市公会堂	→1917.5	福島市			W造/3				
24	大阪市中央公会堂	1913.6.28→1918.10.31	大阪市	辰野片岡事務所	清水組	S・煉造/3、地下1階、塔屋付、増築部RC造	5641.81/2164.17/8425.04	1,846	1911年株式会社仲人である岩本栄之助が公会堂建設費として100万円を大阪市に寄付したことにより、1911年8月に財団法人公会堂建設事務所が設立され、建設計画が始まった。1912年設計競技実施、一等当選岡田信一郎案。岡田案を基に辰野片岡事務所が実施設計。	2002年(平成14年)12月26日重要文化財に指定され、1999年(平成11年)3月から2002年(平成14年)9月末まで保存・再生工事が行われ同年11月にリニューアルオープン。
25	若松市公会堂	→1920	北九州若松区						若松石炭商同組合と筑豊石炭工業組合の寄付により大正9年に建設された。昭和37年に同地に若松文化体育館が建設され、現在は若松区役所(平成2年)が建てられている。	
26	和泉公会堂	1909.→1921	千葉県鴨川市和泉			W造/1	/314/		明治42年着工の耕地整理完成を機に建設された地区住民の共有建築物。瓦葺き棟屋根の主屋の外周に庇を差出し、正面中央にムクリ入母屋の車寄玄関を突出させた、和風公会堂建築に共通した形態をとる。	1999年国の有形文化財に登録。
27	野々江公会堂	→1921	越智郡大三島町			W造/1				
28	飯塚市公会堂	→1922	飯塚市			W造/1				スパンタ、2階座席。
29	旧駒ヶ林公会堂	→1924	神戸長田区		清水栄二					
30	郡山市公会堂	1922.10.22→1924.9.29	郡山市	萩原貞雄	清水組	RC造/2		1階可動 2階固定席144	現在は1階2階合わせて収容人数300人。竣工時は建坪168坪の木造平屋別棟あり。	保存のため修理、設計監修矢橋賢吉。
31	加古川市中央公会堂 (旧加古川町役場)	→1924	加古川市加古川町	渡辺 分記	長尾 金蔵	RC造/3				
32	井原公会堂	→1925	丹波市			W造/1				地区の公民館として使われている。
33	福山市公会堂	→1926	広島県福山市						市制10周年記念事業として、公会堂が建設された。	市街地の9割を焼失した昭和20(1945)年8月8日の福山空襲では延焼をまめがれた(隣接する市庁舎は焼失)。昭和30(1955)年玄関部分や舞台、内装など大幅に改装されたが、昭和39(1964)年に市民会館を新築することになり、のちに建物は解体された。
34	旧西尻池公会堂	→1926			清水栄二					
35	旧大谷公会堂	→1926	栃木県宇都宮市大谷町	更田時蔵		石造/1	/209/			2004年国の有形文化財に登録。
36	旧本所公会堂 (両国公会堂)	→1926.8	墨田区	東京市	森山松之助	RC造/4	1250/274.75	870	東京市政調査会が安田財閥の創始者・初代安田善次郎(1838～1921)の寄付を受け、ホールの建設が決定。関東大震災の影響で一端は工事が中止になるものの、安田が所有していたかつて元武家屋敷の庭園付土地に建設された。	区によると、公式文書は残っていないが建設当時は講演会等に利用されたという。戦中は食料配給所になり、戦後はGHQに接収されクラブとして利用された。1941年に両国公会堂と改称、1967年に安田庭園とともに都から区に移管、1968年に補修と拡張を行い、音楽コンサート、映画上映、演劇公演等に使用され、1972年は802件の利用があった。老朽化のため2001年に利用を、2015年解体された。跡地には公益財団法人日本美術刀剣保存協会が刀剣博物館を建設した。
37	札幌市公会堂	→1927	札幌市							
38	中津市公会堂	→1927	中津市方端			RC造/2				1983年取り壊し。
39	岩手県公会堂	→1927.6	盛岡市	佐藤 功一		RC/2+塔屋6階	4493/1570/3269	860	補助席150席、立見席290、1961年代ホール改造。佐藤武夫『公会堂建築』。	
40	鹿児島市公会堂→鹿児島市中央公民館	1924.8.→1927.10	鹿児島市山下町	片岡 安	佐伯組	RC造/3、地下1階	2719.2/1098.9/3389	1,235	昭和天皇の成婚記念事業として起工。	建物周囲にドライエアアを設け、正面立面及び平面をほぼ左右対称とし、玄関両脇に階段室塔屋を配し、その間に4本のピラスター、イスラム風尖頭アーチの窓を設置する。1945年6月17日の鹿児島大空襲により一部が損壊。1949年鹿児島市中央公民館に改称し、2005年に国の登録有形文化財に登録された。
41	別府市中央公民館 (旧別府市公会堂)	1927.1.14→1928.3.28	別府市	吉田 鉄郎	溝口組	RC造/3				1994年別府市指定有形文化財。
42	武生市公会堂	→1928	武生市蓬萊町		武生土建	RC造/2、地下1階、6階塔屋付			南側と東側で接する敷地に南面して建つ。武生市では初期の本格的鉄筋コンクリート造で、塔屋のランドマーク性を強調する垂直線窓や、楕円等を用いた1階玄関の意匠に特徴がある。	改装著しい。塔屋付。2005年国の有形文化財に登録。
43	岡山市公会堂	→1928.3	岡山市	薬師寺主計		SRC造	2900.47/1589.61/3504.83	1,200		
44	旧日高町公会堂	→1928	豊岡			RC造/1			公会堂としての利用後、日高小学校講堂を経て、戦後閉校した日高高校の講堂に転用された。	
45	岐阜市公会堂	→1928.4	岐阜市	武田 五一		SRC造	4434.74//3855.3	1,189		
46	中間市公会堂	→1929	中間市屋島			W造/1				
47	武生市公会堂	→1929	越前市蓬萊町			RC造/2、一部4階塔屋6階、地下1階	/601/			2005年国の有形文化財に登録。
48	久美浜町公会堂	→1929	熊野郡久美浜町東本町	京都府技師市井某	岩田 春吉	W造/1				設計者は板井公威の顔りか。
49	日比谷公会堂	1928.5.16→1929.10.19	千代田区	佐藤 功一	清水組	SRC造	9800/728.39/5682.46	2,336	350万円の寄附を得て、「東京市政調査会(市政会館)」およびそれに併設する公会堂として計画された。	2014年12月25日施設の老朽化及び耐震性を理由とした大規模改修工事を実施するため、2016年から改修工事が完了まで施設の使用を休止する。
50	久留米市公会堂	→1929.12	久留米市			SRC造	3276.9/1970.1/2356.2	1,050		
51	公会堂	1929年4月	越智郡大西町			W造/1				
52	港区芝公会堂	→1929.9	港区	区営繕課		RC造		800		

53	岡崎市南部公会堂	→1930.	岡崎市柱町			W造/2						取り壊された。
54	名古屋市公会堂	1927.4.2→1930.9.30	名古屋市	市建築課	大林組、清水組、大阪鉄工所	SRC造/4、地下1階、塔屋1階	6402/2760/11939	2,124		昭和天皇御成婚を記念する事業として建てられた。		1980年市制90周年記念事業として大改修が行われた。2017年4月1日から2019年3月31日まで耐震改修が行われ、休館予定。
55	熊本市公会堂	→1930.9	熊本市	大林組	大林組	SRC造	2249.9/1355.7/3118.59	800				
56	京都市公会堂→京都会館別館	→1931.	京都市左京区	京都市建築課	大林組	RC造/2						地下あり。
57	宗方公会堂	→1931.	越智郡大三島町			W造/1						
58	中村部落公会堂 (旧中村補修中学校)	→1931.	新津市			W造/1						本屋間口13間、奥行4間。
59	豊浜町公会堂	→1931.	三豊郡豊浜町			W造/1、一部2階						
60	上之門公会堂	→1931.	川辺郡大浦町	県建築関係部局		W造1階						
61	姫路市公会堂	→1931.12	姫路市			RC造	4052.33/1072.5/3072.63	1,000				
62	豊橋市公会堂	1930.7.→1931.8.24	豊橋市	中村工務所(中村興資平)	松村組	RC造/3	4039.22/1202/2945.27	1,271		1928年(S3)9月市議会で「大興奉祝記念として公会堂を建設する」との議決で建設が決定。		1998年(H10)9月2日国の登録有形文化財に登録。1999年(H11)外壁等の大規模改修工事を開始、2000年(H12)月改修工事が完了。
63	陸前高田市公会堂	→1932.7.	陸前高田市	荒木 通男		W造/2						
64	市立御影公会堂	→1933.	神戸市東灘区	清水 栄二	大林組	RC造/3						
65	呼子公会堂	1932.→1933.	東松浦郡呼子町			W造/1						旧映画館。
66	琴平町公会堂	→1934.	香川県仲多度郡琴平町川			W造/1	/914/					金刀比羅宮の参道沿いに建つ和風を基調とした大型の公会堂で、玄関棟、ホール棟、和室棟から構成される。入母屋造の大屋根や玄関棟、和室棟の小屋根が取り付く外観である。ホール内部は近年の改修で一新された。1998年国の登録有形文化財。
67	象潟町公会堂	→1934.	山形市由利郡象潟町			W造/2						
68	小浜公会堂	→1934.	雲仙市小浜町	今森 安義		W造/2						2010年に改修され「小浜コンベンションホール」として使用。
69	小樽市役所議場兼公会堂	→1934.	小樽市			RC造/3		600 (固定ではない)		1934年竣工の市役所庁舎3階の市議会議場を議会休会時には公会堂として兼用。		
70	旧大津公会堂	→1934.5	大津市浜大津1丁目	大津市土木課石原技師		SRC造/3、地下1階	/430/	100 (固定ではない)		1934年(S9)5月大津商工会議所と大津市立図書館とを併設した大津公会堂として総工費8万4千円で建設された。		当時「橋本町」または「大橋堀」と呼ばれ市役所がそばにあった。1947年(S22)1月大津商工会議所が移転し、内部改装の後、5月3日、日本でも最も早い時期の公民館、大津公民館として開館、1985年(S60)8月17日大津市社会教育会館の名で大津の社会教育の拠点として復活。
71	琴平町公会堂	→1934.9				W造/2						
72	桜宮公会堂	→1935.	大阪市北区							1871年造幣寮としてトーマ・ウオートルズ設計で竣工。1927年老朽化のため取り壊しとなったが、正面玄関の石材が保存される。1935年に保存石材を明治天皇記念館(のち聖徳館に改称)正面玄関として、創建当時の姿に復元。戦後、桜宮公会堂となる。	1956年8月 旧造幣寮遺跡正面玄関が国の重要文化財に指定。	
73	旧宝塚公会堂 (宝塚文化創造会館)	→1935.				RC造/3						
74	加古川市立図書館 (旧加古川町公会堂)	→1935.	加古川市加古川町		前川 依次	RC造/2						
75	御岳公会堂 (旧金襴神社参籠所)	→1935.	山梨県甲府市御岳町字上村			W造/1	/125/			金襴神社境内にあった参籠所を移築し、地区の公会堂としたもの。移築前は檜皮葺と伝えられ、小屋組や主要部材は旧状を残す。京呂組の架構で内部に柱を建てない大空間など、参籠所としての特色を今に伝える。	1979改修行われ、2006年国の登録有形文化財。	
76	静岡市公会堂	→1935.11.	静岡市	中村興資平建築事務所	勝呂建設	RC造/4	3837.9/1371.7/3714.7	1,308				取り壊された。
77	醒井公会堂	1936年	滋賀県米原市醒井字新町			W造/1	/123/			宿場町醒ヶ井の町並の中に位置する。正面と側面前よりは吹きつけ壁、他は下見板張、正面隅はコーナーストーン風の仕上とするなど和洋のデザイン・構法が混在。		2003年登録有形文化財(建造物)に登録。
78	京城府民館		韓国ソウル									
79	台北市公会堂	1932.12→1936.12	台湾台北	台湾総督官房營繕課			//11511	2,056				
80	内之浦公会堂	→1937.	愛媛県八幡浜市保内町	那須喜八郎		W造/2	/108/					川之石港に臨む海岸沿いに建つ地域の公会堂建築。道路沿い西面中央に玄関ポーチを設け、外壁はセメントモルタル洗出し仕上げとし、陸屋根に見せる。内部は2階を畳敷きの大広間とするなど地区公会堂の性格をもつ。2001年国の有形文化財に登録。
81	旧波佐見町立中央小学校講堂兼公会堂	→1937.	長崎県東彼杵郡波佐見町	清水玄治		W造/1、一部2階	/974/			1937年波佐見尋常高等小学校の講堂兼公会堂として建てられ、1976年からは波佐見町立中央小学校講堂兼公会堂となり、1995年小学校は新築移転、現在は講堂だけが残る。		旧校庭の東端に建ち、屋根は東西を半切妻とし、セメント瓦を葺く。南北面に下屋を付け、外壁は下見板張とする。正面はベディメント付の玄関ポーチを設け、2階にベイウィンドウ付の切妻屋根を張り出す。2010年1月5日国の登録有形文化財に登録された。
82	喬柏園(旧柏崎公会堂)	→1938.	新潟県柏崎市西本町			SRC造/2、一部3階 塔屋・煙突及地下 案内	/535/					2007年国の有形文化財に登録。
83	群山公会堂		韓国群山									
84	新潟市公会堂	→1938.11.28	新潟市	市建築部(杉本鏡介)	長谷川工務店(長谷川龍雄)	SRC造/3、時計塔付	4953.3/1795.5/4377.5	1,202		新潟石油の創業者、新津恒吉の寄附45万円により建設。		1945年新潟市に進駐したアメリカ軍が、公会堂に師団司令部を置く。1964年新潟地震では、時計塔の時計が止まり、以後時計は外された。1994年12月には老朽化により閉鎖、1995年に取り壊され、1998年跡地に「新潟市民芸術文化会館」が完成。
85	佐世保市公会堂	→1938.5.	佐世保市	森山工務所	清水組	SRC造	7427.6/1524.6/7629.27	1,426				
86	日野町歴史民俗資料館 (旧根雨公会堂)	→1940.	鳥取県日野郡日野町根雨497	岡田孝雄		W造/2	/473/					切妻造、妻入、間口9間、奥行16間半、木造2階建ての大規模な公会堂である。山腹に建つ外観は周囲の町並みに調和するように、庇を回して抑えた意匠になる。1997年国の有形文化財に登録。
87	新居浜市公会堂	→1941.	新居浜市			W造	3636.34/1142.08/1396.06					
88	仙台市公会堂	→1950.1.	仙台市	武 基雄	清水建設		4032/1912/3012.1	1,301		補助席300席、立見席200 佐藤武夫『公会堂建築』。		
89	高岡市公会堂	→1951.3.	高岡市	市建設部営繕課	旭工業	W造	/1194.6/1735.8	840		佐藤武夫『公会堂建築』。		
90	豊島区公会堂	→1952.10.	豊島区	小山 秀吉	田和建設	RC造	//1714.35	928				
91	富山市公会堂	→1954.11.	富山市	松田・平田設計事務所	鉄道工業	SRC造	3665/2805.41/7141.35	2,268		佐藤武夫『公会堂建築』。		
92	広島市公会堂	→1955.2.	広島市	白土建築事務所	藤田組	SRC造	/2885/8002	1,746				
93	中野区公会堂	→1955.3.	中野区	梓建築事務所	松井建設	RC造	/159.06/1662.21	1,104				
94	目黒公会堂	→1956.5.	目黒区	平衡構造建築事務所	長建設	SRC造	4480.16/2386.3/2495	1,055				
95	杉並区立公会堂	→1957.7.	杉並区	日建設計工務	鹿島建設	SRC造	2917.2/2095.5/5669.4	1,212		旧公会堂は、1957(S32)に竣工。活動弁士徳川夢声氏、作曲家小松耕輔氏、松山バレエ団団長(当時)清水正夫氏らによる専門委員会が設置され、徳川氏の意見により区の建設予定地に約1,000㎡の土地を買い増して1,176席収容のホールが完成。 豊平館附属公会堂の後継施設。この建物の新築によって豊平館は移築保存、附属公会堂は取り壊し、佐藤武夫『公会堂建築』。	2003年に旧公会堂を取り壊して改築し、2006年6月1日にリニューアルオープンしたものが現在の公会堂である。	
96	札幌市民会館	→1958.6.	札幌市	日建設計工務	大林組	SRC/	8545/2439/8163	1,592				
97	釧路市民会館	→1958.6.	釧路市	日建設計工務	東海興業	SRC造	2258/1334/1826	1,000		立見200席。		
98	旭川市公会堂	→1958.10.	旭川市	旭川市建築課	広野組	SRC/	6500/1769/3505	860		補助席100席、佐藤武夫『公会堂建築』。		
99	葛飾区公会堂	→1958.11.	葛飾区	宮川英二研究室	株木建設	RC造	5211.53/936/1909	814				
100	宇和島市公会堂	→1958.9.	宇和島市	暁設計事務所	鹿島建設	SRC造	/844.6/2174.93	1,060				
101	今治市公会堂	→1958.9.	今治市	丹下健三研究室	大林組	RC造	2970/1511.4/22671	1,014				
102	福島市公会堂	1957.12.25→1959.2.28	福島市	山下寿郎設計事務所	竹中工務店	SRC造/3、地下1階	6800.01/2014.06/4259.08	1,530		福島市市制直後は、当時の福島市立図書館や福島県庁舎の玄関、応接室を払い下げて公会堂として利用し、1908年(明治41年)に奥羽六県共進会として利用され、接待や大園遊会に利用された。1917年(大正6年)5月には大正天皇御大典記念として木造3階建ての公会堂が建設され、尖塔が立つ歐風建築だった。		
103	世田谷区区民会館	→1959.3.	世田谷区	前川國男建築事務所	大成建設	RC造	13177.75/3373/4891.6	1,294				
104	文京公会堂	→1959.4.	文京区	佐藤武夫設計事務所	戸畑組	RC造	6468/2145/5412	2,000				
105	小松市公会堂	→1959.4.	小松市	浦建築研究所	鹿島建設	SRC造/	2109/1613/4953	1,150		補助席350席、佐藤武夫『公会堂建築』。		
106	青森市民会館	→1960.5.	青森市	日建設計工務	竹中工務店	SRC造	1669.8/1408.3/5282.54	1,420		補助席300席、佐藤武夫『公会堂建築』。		

107	防府市公会堂	→1960.9	防府市	佐藤武夫設計事務所	鴻池組	SRC造	22519.2/2040/554/9.3	1,604		
108	長崎市公会堂	→1962.6	長崎市	早稲田大学武基雄研究室	大長崎建設	SRC造/5	3600/1981/5992	1,800		
109	岡山市公会堂	→1963.1.31	岡山市	佐藤武夫設計事務所		八角形RC造/4、地下1階	4549/3061/6959	1,726		
110	渋谷公会堂渋谷(C.C.Lemonホール)	→1964	渋谷区	建設モード研究所		4階地下1階	//8150.53	1階 1,352 2階 966		東京オリンピックのウェイトリフティング競技会場として使用された。翌年に改めてコンサートホールとして開業。2005年7月から改修工事が進められ、翌年10月1日に完了した。改修により回転舞台は撤去され、舞台の真下にあった道(せり)の機械室は出演者控室に改められた。この時、公会堂の命名権が電通に売却され、電通を通じてサントリーが取得、自社飲料商品名を冠して「渋谷C.C.Lemonホール」と命名。2015年に解体され、2019年5月に新建築物が竣工。
111	武蔵野公会堂	→1964.1.21	武蔵野市	日建設計		RC造/3、地下1階	1954/1061/2727	192		
112	小金井公会堂	→1964.9.20	小金井市	建築総合計画研究所		円型RC造/2、一部3階	4600/861/2218	904		
113	米子市公会堂	→1968.4	米子市	村野・森建築事務所	鴻池組	RC造	11467.5/2221.65/3706.7	1,178		

この表は、王佳敏(名古屋大学大学院環境学研究科博士前期課程)作成「公会堂一覧」を基に、西澤泰彦・砂本文彦が加筆修正を施して作成した。

添付資料2「日本の公会堂建築の変遷」



- 0: 奈良県公会堂(1904)
- 函館区公会堂(1909)
- 額田郡公会堂(1913)
- 1: 大日本報徳社大講堂(1903)
- 2: 大阪市中央公会堂(1918)
- 3: 郡山市公会堂(1924)
- 4: 両国公会堂(1926)
- 5: 鹿児島市公会堂(1927)
- 6: 別府市公会堂(1928)
- 7: 日比谷公会堂(1929)
- 8: 名古屋市公会堂(1930)
- 9: 豊橋市公会堂(1931)
- 10: 御影公会堂(1933)
- 11: 静岡市公会堂(1935)
- 12: 台北市公会堂(1936)
- 京城府民館(1936)
- 13: 東京文化会館(1961)
- 14: 北沢会館(1962)

注: 本図は、大林財団2017年度助成によって収集した日本の公会堂建築の情報を基に、西澤泰彦(名古屋大学)と砂本文彦(神戸女子大学)が作成した。